浜比嘉島における神話の世界

加藤　悠

１．はじめに

琉球列島または南西諸島、略して南島などと呼ばれる日本本土と台湾の間に点在する 40 余りの島々には、兄妹始祖説話やアマンチューという巨人の天地分離型開闢伝承、アマミキヨやアマミク・アマミキューという創造神の登場する創生伝承などの始祖神話や天地開闢神話といった民間に伝わる神話が多く存在する。これらは総称して南島民間神話などと呼ばれているが、本研究はその中でもアマミキヨとシネリキヨと呼ばれる二人の男女神にまつわる創世神話に焦点を当て、さらに沖縄本島内でも数多く存在するアマミキヨ・シネリキヨの神話伝承地の中でも、うるま市に属し、神々が住む島と言われる浜比嘉島において調査を行ったものである。

２．南島民間神話について

２.１　琉球王朝神話と民間神話について

民間に口承で伝えられている説話類や古謡等、またユタやノロなどが口承で伝えている呪詞群から区別して、琉球王府編纂にかかる正史類に記載されている神話を琉球王朝神話という。すなわち、1650 年の『中山世鑑』、1701 年の『中山世譜』、1750 年の『球陽』等に記載されている神話である。また『中山世鑑』に先行する『琉球神道記』[1)]、『おもろさうし』[2)] 等の影響も検討する必要がある（山下 2003）。

『中山世鑑』等の琉球王府の正史類に、アマミキヨ・シネリキヨ及びそれと同じものを指すアマミキヨ・シネリキヨ系の神の名自体を発見することはできるが、今回調査を行った浜比嘉島にアマミキヨ・シネリキヨがいたという記述はなかった。このことから浜比嘉島における神話は、口承で伝えられた説話類や古謡類の民間神話という位置づけで研究を進めることとする。

また、ここで民間神話というのは、広義にいう神話であり、民間に口承で伝承されている神話群であり、普通は folk-tale のなかに含まれていると解されており、神話、昔話、伝説という一応の区分はあるが、話者の立場によりその機能は多様に変化するものである（山下 2003）。

２.２　アマミキヨ・シネリキヨについて

アマミキヨ・シネリキヨとは、日本列島におけるイザナギ・イザナミにあたる神であると思ってもらえばわかりやすいかと思う。アマミキヨ・シネリキヨ系統の神話は琉球王朝神話に記述されているものや、沖縄本島の各地域に伝わる古謡（オモロやウムイ、クェーナ等）といった民間神話の形で数多く存在し、その内容にも多少の差異

が見られる。ここではその一例として『日本思想大系　第 18 巻　おもろさうし』（外間・西郷 1972）から『おもろさうし』10 巻「ありきゑとのおもろ御さうし」512 番のオモロを載せる。

一　昔初まりや
　　てだこ大主や
　　清らや　照りよわれ
又　せのみ初まりに
又　てだ一郎子が
又　てだ八郎子が
又　おさん為ちへ　見居れば
又　さよこ為ちへ　見居れば
又　あまみきよは　寄せわちへ
又　しねりきよは　寄せわちへ
又　島　造れてゝ　わちへ
又　国　造れてゝ　わちへ
又　こゝらきの島々
又　こゝらきの国々
又　島　造るぎやめも
又　国　造るぎやめも
又　てだこ　心切れて
又　せのみ　心切れて
又　あまみや衆生　生すな
又　しねりや衆生　生すな
又　然りば　衆生　生しよわれ

このオモロの解釈についても諸説あるが、天界での任命を受け国土を創造し、人類の起源である子供を生むという流れになっている。他の文献においても同じような流れだが、『中山世鑑』などには農耕の起源が記載されてくるようである。

また、このアマミキヨ・シネリキヨについては従来先人の諸説があり、この神を一柱とするか、二柱とするかがわかれるところである。表１はアマミキヨ・シネリキヨ系の呼称についてこれが記述されている文献からこれを示したものである。文献は編述の時代の古いものから順

表1　アマミキヨ･シネリキヨ系呼称一覧
（山下 2003･p.89 より）

文　献　名	神　名
琉球神道記	シネリキュ（男神） アマミキュ（女神）
おもろさうし	あまみきよ しねりきよ
中山世鑑	阿摩美久
混効験集	あまみきょう しねりきょう 琉球開闢の男女也
中山世譜	阿摩弥姑（女神） 志仁礼久（男神）
球陽	男ハ志仁礼久ト名ケ 女ハ阿摩弥姑ト名ク

に示すこととする（山下 2003）。また、表１のタイトルについては、便宜上筆者がつけたものである。この男女２神については一神であると考える研究者もいるが、『混効験集』[3)] のように明らかに男女２神としている文献が存在することなどから男女２神と考える説が優勢を示している。

また、表２は琉球列島における古謡をアマミキヨ・シネリキヨ系の神名の現れてくる古謡を整理して示した表（山下 2003）で、図１は表２をもとに筆者が地図上の位置を示したものである。表１と同じく表２のタイトルは筆者が便宜上つけた。

表2　アマミキヨ･シネリキヨ系神名が現れる古謡一覧

（山下 2003･p.94 より：配置を一部改変、地名の丸数字は筆者による）

地名	古謡	アマミキヨ・シネリキヨ
①大宜味村字喜如嘉	柴差しのウムイ	むかしぬ あまーみくが しるみーくが　きざしや
②東村字平良	オモイ（シナマ）	あまじかさ いぬいじかさ
③恩納間切恩納村	しらちなのオモイ	あまんちょの しねんちょの
③恩納村	海オモリ	ウー　あまんちゅぬ　へイ ウー　しねんちゅぬ　へイ
④知念村	オモロ	あまみきよが のだてはじめのぐすく
⑤座間味村字阿佐	たきねーいぬウムイ	あまみちゅが　しぬみちゅが あまみちゅが　しるみちゅが
⑥国頭村安田	田の祝いのクェーナ	あまん世ね初め しるんちゅぬさりま
⑦浦添村字西原	アマウェーダクェーナ	あまみつーが始まる しるみつののだてる
⑦浦添村字沢岐	アマウェーダクェーナ	あまみちゅがはじみぬ しらみちゅがのだての
⑧玉城村字百名	坐グェーナ立グェーナー共通詞	あまみつがはじみぬ
⑨久米島仲里間切	仲里城祭礼の時のくわいにや	あまみきよう　しのみきようか あまみきや　しにうやきや
⑩伊平屋島	ミセゼル	アマミキヨガハジメ シネリキヨガハジメ
⑩伊平屋島	鹿児島の御手ニ入、三年目ニ嶽々トノヘ神出現ニテ神託ミセゼル	アマミキヨニ　イセ祭り スレ
⑪伊是名島	雨乞ノダテゴト	アマミキゥュ イセ祭
⑪伊是名島勢理客	字勢理客のテルクグチ	エーシルンチェノヌダテル エーアマンチュノハジマル

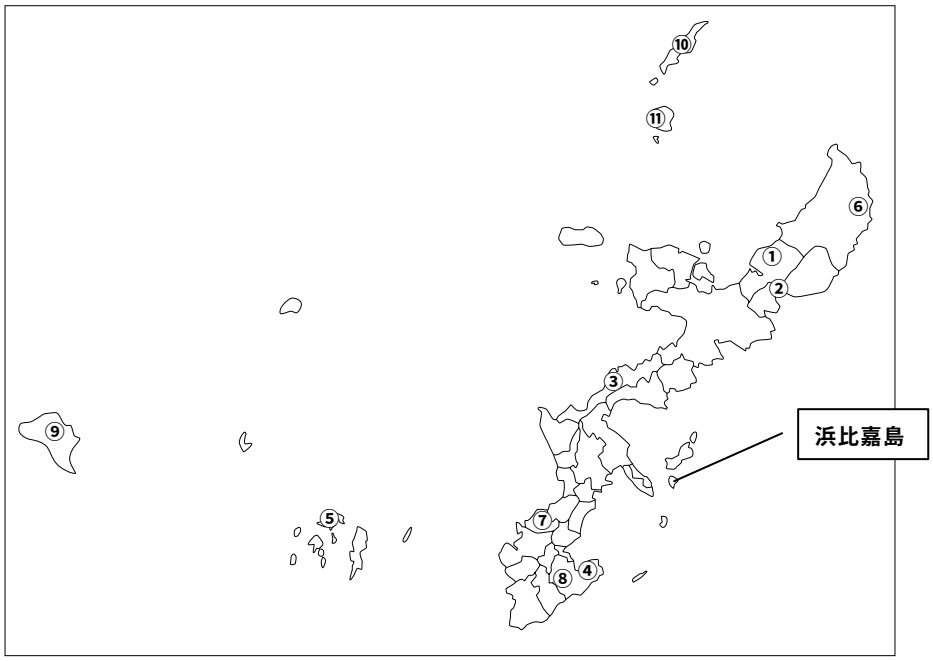

図1　アマミキヨ･シネリキヨ系神名が現れる古謡分布図

表２及び図１から、アマミキヨ・シネリキヨ系の神名の伝承は沖縄諸島のほぼ全域に渡って見出すことができるが、奄美諸島及び宮古諸島、八重山諸島には及んでいないことがわかる。

奄美諸島でこの男女神の神話は伝承されていないが、このアマミキヨ・シネリキヨの開闢神話はもともと沖縄のものでなく、その名前から考えられるように奄美大島の神話だったのではないかと推測されている。伊平屋島・伊是名島に伝承されているテルクグチには、アマミキヨ・シネリキヨの現れるものが一例であるが、あとのものにはテルミク・ナルミクがアマミキヨ・シネリキヨと同様に使用されている。これは奄美諸島のウムイに出てくるナルコ・テルコと対応するものであって、伊平屋島の田名のテルク口などはその中に喜界島・徳之島などが出てきており、奄美諸島との関連を考えさせるものがある（山下 2003）。

なお、表２及び図１によると、今回調査を行った浜比嘉島も、アマミキヨ・シネリキヨ系の古謡は伝承されていないことがわかる。

３．浜比嘉島における民間神話

３.１　浜比嘉島について

今回調査を行った浜比嘉島は沖縄本島中部に位置するうるま市に属し､2005 年に具志川市、石川市、中頭郡与那城町と合併しうるま市となった旧勝連町（沖縄本島東海岸に突き出す与勝半島の南半分と浜比嘉島、津堅島の有人島と浮原島、南浮原島の無人島からなる）の一部である。1997 年以降、浜比嘉島は旧与那城町の平安座島と浜比嘉大橋によって結ばれており陸路での移動が可能である。

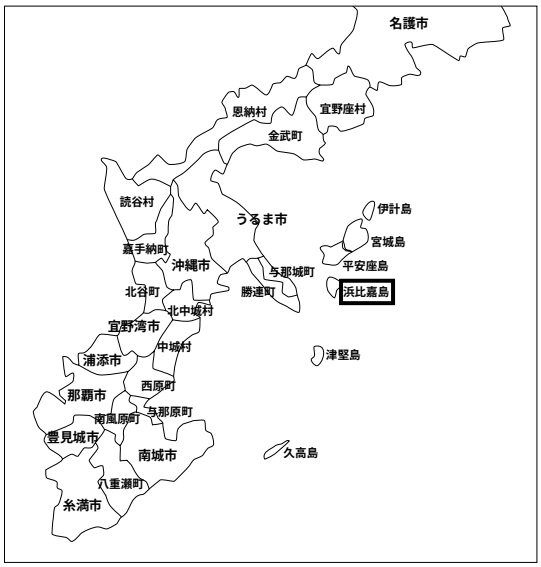

図2　浜比嘉島の位置

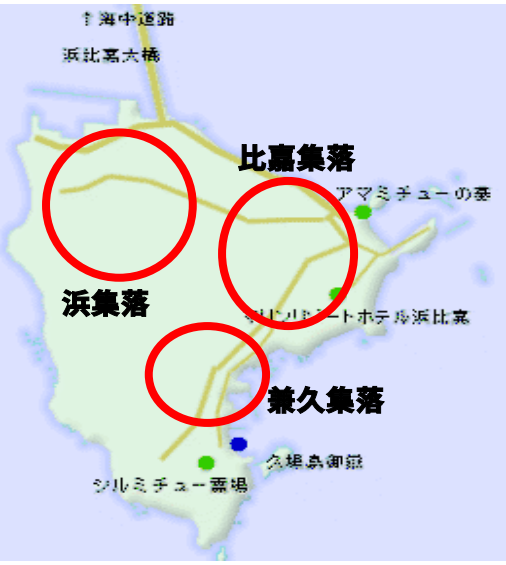

図3　浜比嘉島内地図

島の周囲は 6.5km、約 170 世帯、人口約 420 人（2004 年３月現在）の小さな島である。島内は浜地区と比嘉地区に分かれていて、大橋を渡って右に行くと浜地区、左へ行くと比嘉地区となっている。それぞれ、浜集落と比嘉集落があるが、島の南島には兼久という比嘉漁港を有する集落もある。

農業と漁業が盛んで、特にもずくは沖縄県全体の３～４割以上を占め、県１位の漁産を誇っている。

また比嘉集落のエイサーはその緻密な動きが舞台芸能のようだと賞賛され、第一回全島エイサーで優勝したほどで、与勝のエイサーで有名な屋慶名エイサーは比嘉エイサーの流れを模範としたものである。しかし若い人たちの島離れに伴い、今では幻のエイサーと呼ばれ、比嘉区民総出でエイサーの伝統を守っている状態である。

琉球開闢の祖神・アマミキヨとシネリキヨらの神々が住む島として、沖縄本島内外から参拝者が訪れる一方、リゾート地として夏には多くの観光客で賑わっている。

３.２　浜比嘉島におけるアマミチュー伝説

浜比嘉島では、琉球の創世神アマミキヨ・シネリキヨを島の方言でアマミチュー・シルミチューまたはアマミキュー・シルミキューと呼び、ユーヌ・ハジマリ（世の始まり）の夫婦の神であると伝えている。これ以降、本論文ではアマミチュー・シルミチューと統一して記述することにする。

島で伝えられているアマミチュー・シルミチューの神話にも他と同様様々な話が伝えられているが、以下に記述するのは『かつれんの民話』（遠藤 1990）に収められている民話集からアマミチュー・シルミチュー神話について語られているものを引用したものである。

１　世の始まり

昔は、裸世の世の中いうて、最初はね、御天から男と女の人が下がってきたのか、また唐の国から大きな寄木にしがって流れてきたのか、どっちかはわからないけどね、ムルク[4)]に着いたって。そこには、食べ物がなかったらしい。それで、寄木で流れて屋慶名の藪地[5)]に行ったら、藪地はこわい動物がたくさんいてね。あっちで生活ならないで、また戻ってきて、ムルクにいらっしゃったわけ。

そしたらまた、ムルクに食べ物がないということで、あのシルミチューで岩を探して、あっちで生活されて、務めたって。それから、みんな女と男と付き合いしてから、人間はこれからの広がりって。だから、シルミチューの岩の下に神様がいらっしゃるでしょう。また、ムルクはね、戻ってきたいうて、この人が、

「戻てぃ来ぬムルク。」

で、ムルクと名前を付けたって。　（平成元年１月 16 日聴取）

２　世の始まり

この世の始まりの人は、久高に降りられたそうだ。だけど久高は水がなくて、この比嘉の島にいらしてる。あのチキンガー[6)]として、津堅に向かっていて、屋慶名に回って行くところの高い山のあしに、水のよく出ているところがあるんだよ。

この人は久高には住まないで、

「比嘉は水があるから、こっちで住んでいこう。」

としたって。シルミチューは立派な洞窟もあるし、水もあるんだから、こっちで住んでからに、シルミチューの洞窟で亡くなったという話があった。

これは一人でね、男神とかなんとかいうていたんだが。

（平成元年１月 17 日聴取）

３　世の始まり

私のお爺、アガリウェーガー[7)]のお爺から聞いたの。だっ、親川カマドーだったかね。お爺はね、トーカチ[8)]もやってから亡くなられたから、あの人の話。

アマミチューは夫婦だけど、子供ができなかったってよ。この人、どこから来られたかはわからんよ。でっ、セェー小[9)]がよ、二匹、おすとめすがアマミチューのところに来たって。

これが男と女の関係したから、セェー小が夫婦の交わりをするのを見て、

「こんな小さい動物でも夫婦の交わりをするのに、自分たちもしてみよう。」

とのことでね、夫婦の交わりをするようになったって。アマミチューの夫婦もこのあとから子供が生まれたって。こんな話があったよ。（平成元年３月７日聴取）

４　シルミチュー

昔、シルミチューは天から降りると、一番初めは久高に渡っていらして、久高

には洞窟がないわけね。昔は洞窟で生活していたから、向こうにはそんなものはなかったから、津堅に渡っていらして、津堅には洞窟があったけど、水がなくてね。水がなかったから、ここの比嘉の国に渡ってきて水を探したら、カー[10)]があるわけさ。津堅から渡ってきて見つけたから、これをチキンガーと名付けたわけよ。

「ここには水があるから、開かれる。」

と言って、シルミチューが洞窟を探していたら、大きな洞窟があったので、そこに住むことにしたって。

　このシルミチューの洞窟には、地と御天を結ぶ石があるよ。また、いわば天から下ってきたお釈迦様というのがあってね。また、男のあそこの型も、女のあそこの型もあるさ。田んぼの型もあるよ。女の型というのは、これはめずらしい、これくらいの穴がある石だよ。また、頭だけの赤ん坊の型があってね、シルミチューは、ここにいて育っていたわけ。

　シルミチューの洞窟から下りた比嘉兼久の浜のすぐまん前にクバ島といって、険しい島があるよ。

　あの島で、シルミチューはウミチルーという女の子を生んだわけ。ウミチルーはシルミチューのくれた子だったんだよ。ウミチルーは、クバ島にいたってよ。

　それでバン殿内[11)]という家の婆さんが、神からの知らせだったのかね。

「向こうのクバ島にウミカナーが残っている。ウミチルーは、そこで子供を生んだけど、ウミカナーが落ちて残っている。」

と言ってよ。

　私は小さくてわからなかったけどね、婆さんがタッタッタッタッ震えていたからね、もうこれ一つだけは忘れられなくて覚えているわけさ。それは、私の家の前のアシャギにね、昔からアシャギ[12)]には畳があるよ。畳があるからね、その畳の上で震えているわけよ。

　そして、この人は一週間ももの言わなかったよ。食べ物を持って行っても食べないし。一週間アシャギにいて、茶も召し上がらない。水も何一つも一週間召し上がらないわけ。そうしたから、一週間目の明け方には、顔もかわってね。これまで、私は覚えているんだよ。

　私が七つ、八つなっていたね。パーパーは私を自分の子や孫よりかわいがっていたから、

「水持ってきなさい、マシー。」

とパーパーが言ったから、

「水、飲みますか。」

と私が聞いたわけさ。そしたら、

「うん。」

と言うので、急いで水持っていったら、茶碗いっぱいの冷たい水を飲まれてね。

それから、クバ島にウミカナーを迎えに上がられていったというんだよ。普通ではとても上がれないクバ島の岩の上に上がっていったわけ。そして、ウミチルー、ウミカナーと呼んで捜してさ、ウミチルーの遺骨を見つけたから、それを持って下りてきたわけさ。

この遺骨を持って下りてきたのを、私も覚えているよ。それから、あのウミチルーの遺骨は、アマミチューに初めはお迎えして、ここのアマミチューに葬っているわけさ。（昭和 48 年８月３日聴取）

５　シルミチュー

シルミキョーのことは、ぼくが知ってるんじゃない。ぼくの嫁のおやじから聞いた話だよ。シルミキョーのところにはね、洞窟に入ってすぐ左に苗代があって、また中には、男と女の形をしたのがあるよ。ここを拝むと子宝に恵まれるといって、本当に子宝に恵まれた人もいたよ。

嫁のおやじの区長時代までは、正月になると、この苗代に水があれば豊作、なければ凶作といって占いをしていたね。

また、昔はあそこにつぼがあって、正月元旦には、神人たちが石ナーグといって、年々歳々の年の刻みにね、一個ずつ入れよったらしいんだな。入れよったが、このつぼが一杯になったもんだからね、つぼの石をこぼして、格好のいい石だけ入れてあるらしいんだよ。恐らくあのつぼには百五十個ぐらい石が入るから、あの石があれば、どれぐらい昔からやっていたかわかるんだが、もうつぼに入っていた石の数がわからなくなったから、シルミキョーの祭りの始まりもわからなくなったよ。もう生きてれば百ぐらいになるがね、この人の話では、ツキ石といって黒い石ね。あの昔の臼があるだろ、あれよりもずっと硬い石で、つぼの中に「天帝子」「天太子」「天孫子」といって刻まれた石が三つ入っておったというんだ。それが三つ入っていたが、首里から信者が来て、学問のために調査するといって、持って行ってなくしているんだよ。

また、御神体の赤銅の鏡があって、これはぼくもよく見たんだが「天下一　藤原吉次」といって書かれていた。藤原家の公家の時代かな。なぜ藤原家が公家の時代にここに奉納したのか。また、昔からここにあったものと取り替えたのか、これがわからんのだよ。昔の祝女が正月元旦にオモロを歌って、この鏡を磨いていたっていうんだ。だから、今の祝女の上の祝女まではオモロ知っておるんだが、今の祝女は九十余るがね、もうわからないんだ。この鏡も十年前に盗まれてしまったよ。

戦前はね、正月になると、首里から士族がもう四、五十名も、白足袋はジャリ道にいいから、白足袋を履いてシルミキョーを拝みに来よったんだ。それで、小学校の前は、昔の畑だったがね、あそこに洞窟があるよ。あの洞窟の穴から滝みたいに水が落ちよったんだ。そのシーローガーで手足を洗って、何もかも着替え

て、浜までまたはだしで歩いて行って、シルミキョーを拝んだんだよ。

（昭和 63 年２月 24 日聴取）

６　アマンジュ墓

比嘉にはね、大きなお墓で、アマンジュ墓ってあるんですよね。

このアマンジュにはね、唐の国から来られて、こっちで亡くなられた方がいたからね。比嘉の人がね、ちゃんとお墓造って祭っているんですよ。

（昭和 63 年２月 24 日聴取）

筆者が浜比嘉島で現地調査を行った際も、この神話について詳しく知る人はもうほとんどいなくなってしまったということで、詳細な話を聞くことはできなかった。

お話を聞いた浜比嘉島出身のＡさん（昭和２年生まれ）は、戦後間もない時に、神話に詳しかった島に住むおじいさんに聞いたという話を教えてくれた。Ａさんは父は浜比嘉島出身だが、母は大宜味の出身で、両親からアマミチューの神話を聞いたことはなかったという。Ａさんが聞いたという話によると、アマミチュー・シルミチューは浜比嘉島に来る前は久高島や玉城など（詳しく覚えてないという）を転々としていたが、最終的に浜比嘉島にやって来てこの地で亡くなったという。事前調査の段階で浜比嘉島に来る以前は津堅島にいた、という説が多く見られたので、それについて訪ねてみると、津堅島にいたという話は聞いたことがないともおっしゃっていた。

また、Ａさんはクバ島でウミチルーの遺骨を発見したのは 100 年くらい前の島のノロの家系の方だったと思う、ともおっしゃっていたが、上記に記載の民話「４　シルミチュー」では、バン殿内（村番所をしていたことからついた屋号）という家のお婆さんが発見したということになっている。なお、「４　シルミチュー」の話者は『勝連村誌』の記述から比嘉のノロ [13] の家系の方であることがわかった（ただし同姓同名の場合もあり断定はできない）。また、『勝連村誌』（福田 1966）では発見者はノロ（またはその家族）ということになっており、ノロまたはその家系の方なのか全く違う方なのか、結局のところ誰が発見したのかははっきりとわからない。

また、詳しくお話が聞けるのでは、と紹介されたノロのもとも訪ねたが、現在は島にお住まいでないということでお話を伺うことができなかったことが残念である。

『かつれんの民話』（遠藤 1990）に掲載の話も、話の内容が比較的新しい時代の話や、アマミチュー・シルミチューに関わる行事などの話が中心となっており、二人の活躍や関係などについて詳しく伝えたものになっておらず、今では詳細な伝承を失っているのだという（遠藤 1990）。

以下に記述するのは神話に関連する島の史跡についてである。島における史跡の位置関係については「図３　浜比嘉島内地図」を参照していただきたい。

①アマミチュー墓

略してアマミチューと呼ばれ、アマミチュー・シルミチューの二神の他いろい

ろな神が葬られているという。アマンジーと呼ばれる比嘉集落北東の岩山だけの小さな島にある。干潮時でないと近づけなかったが、現在では道がつけてあり歩いて行けるようになっている。また、入り口を石で積み廻しただけのものであったのを、明治20年頃に切石によって形を整え、大正初期に現在のようにセメント塗りに改めた。(福田 1966)

写真1　アマミチュー墓

②シルミチュー（シルミチュー霊場）

島の南々東端にあり、アマミチューとシルミチューが初めて住んだとされる洞窟である。大正初期に、海外在住者の寄付金によって洞窟内に瓦葺の小祠が建てられ、中に天帝子、天太子、天孫子と刻された三個の石と多数の小石が詰められ、さらに2個の鏡を入れた壺（南蛮甕）が安置されている。毎年年頭拝みの際に、ノロが浜から格好の小石を拾ってきて壺に入れる例になっているので、小石の数はその入れはじめ以降の年数を表す貴重な資料であるが、明治初期に小石が壺一杯になっていたので、当時の関係者が小石の歴史的意味を悟らず数えもせずに捨ててしまい、貴重な資料を無駄にしてしまったことが惜しまれている。

洞窟の中に数 10 センチほどの表面に水田のような区画がある平たい岩があり、そこにはいつも水滴が垂れていて水が溜まっている。この水の溜まり方の多少で作物の豊凶を占うという。

また、女陰の形をした鍾乳石があり、子供がいない婦人が祈願すると子宝に恵まれるといわれ、多くの参拝者が訪れている。（福田 1966）

写真2　シルミチュー

③久場島の御獄（ウミチルー墓）

兼久の沖にあるクバ島と呼ばれる大岩の中腹にあるウミチルーの墓である。もとは海岸から上れたが今は崩れて登れなくなっている。そのため現在はコンクリートの拝所が建てられている。クバ島にいたウミチルーは 10 歳の頃、海に投げ捨てられたという。小島（1987）によると、ウミチルーというのは「思鶴」にあたる沖縄の童名の一例である。

『勝連村誌』によると明治の初め頃、毎晩神の霊示に悩まされてノイローゼになった当時のノロ（その家族ともいう）が、他の神職や祭事関係者を伴って、ク

バ島に登った。この大岩の頂上までは男でも登れない程険阻な崖になっているが、ノロは岩に足を踏み入れるや大声で「ウミチルーヤクマドー」（ウミチルーはここだぞ）と呼びながら、やすやすと頂上に登り、一塊の人骨を拾い集めて用意した白布に包み、これを抱いて又楽々と駆け降りてきた。そして霊示の通り抱いてきた骨をアマミチュー墓に葬ったところ、ノロのノイローゼは拭うがごとく消えてしまったと、世にも不思議な出来事として今に語り継がれている。（福田 1966）

４．考察

今回、浜比嘉島での調査を行うことを決めた要因として、事前調査の段階でインターネットによる検索に浜比嘉島におけるアマミチュー・シルミチュー神話が多数ヒットしたことが挙げられる。実際、アマミチュー墓やシルミチュー霊場には、島民はもとより、沖縄本島内外から多くの参拝者が訪れていた。参拝者はユタのような方や一般の観光客など様々であった。お話を聞いた島民の方の中にはほぼ毎日訪れるという方や、現在は足が悪くなって頻繁には行けないが元旦の年頭拝み（島のノロが先立って島の 12 箇所の拝所を巡拝すること）の際には参加しているという方もいた。また、島を離れて暮らす島出身の方々も正月帰省の折には年頭拝みには参加するという。

これらのことは、地元でアマミチュー・シルミチュー神話が深く浸透し生活の中に息づくだけでなく、沖縄ひいては県外にもおいても浜比嘉島がアマミチュー・シルミチューの神々が住まう島だという認識がなされているということがわかる。

しかし、これだけ認知度の高い浜比嘉島だが、沖縄諸島全域に広がるアマミキヨ・シネリキヨ系の神名を見つけられる古謡の中に、その名は発見できていない。これはどういうことだろうか。

『日本の神々』の中で浜比嘉島について記述した小島瓔禮氏も、浜比嘉島のアマミチュー・シルミチュー神話については「与勝諸島の浜比嘉島の比嘉（勝連間切比嘉）は、琉球の古典に見える創世神のアマミキヨとシネリキヨの伝説地として知られている。」（小島 1987）と、琉球の古典つまり琉球王朝編纂の正史類や古謡に見られるアマミキヨ・シネリキヨ神話が、正史や古謡にはその地名は発見できないが浜比嘉島にも伝承されている、ともとれる含みのある言い方をしている。

また、ウミチルーの遺骨発見の事件や、アマミチュー墓、シルミチュー霊場などの本格的整備が明治～大正、昭和初期に集中している。このことも踏まえ、先述の琉球王朝の正史や古謡といった古い文献等から浜比嘉島の名が見つけられないということは、浜比嘉島が神話伝承地として沖縄各地へ広がりをみせたのが、比較的新しい時期であったのではないかと推測した。

しかし、文献や古謡の中にその名が見つけられないからと言って、浜比嘉島におけるアマミチュー・シルミチュー神話が広がりを見せたのが比較的新しい時期であると断定することもできない。

そもそも神話や伝説、伝承の類をいつ、誰が、どのような目的のために作ったのか

ということを特定することは不可能である。たとえ、神話が真実であろうとそうでなかろうと、浜比嘉島におけるアマミチュー・シルミチュー神話を信仰し、参拝する島民の方々や他の参拝者において、それは間違いなく真実であると思う。

注

１）琉球にはじめて浄土宗をもたらした袋中上人が、国王、尚寧王の願いによって著した。1603年～1606年までの３年間の滞在中に琉球神道について具体的に記述した最古の文献である。全５巻からなり、天地開闢神話から神出現の諸相や説話、または権現信仰７社の縁起や為朝伝説、銘刈子伝説などの記述がみられる。

２）尚清王代の嘉靖 10 年（1531 年）から尚豊王代の天啓３年（1623 年）にかけて首里王府によって編纂された歌集。沖縄の古い歌謡であるおもろを集録したものである。なお「おもろ」の語源は「うむい（＝思い)」であり、そのルーツは祭祀における祝詞だったと考えられている。全22 巻。

３）1711 年首里王府で編纂された辞典である。別名「内裏言葉」といい、女官や「おもろさうし」、古老の覚えていたことばを集めたものである。

４）比嘉の集落の東方海岸。

５）那城村屋慶名に属する無人島。

６）島の西海岸にある泉。現在は水は豊富ではない。

７）屋号。

８）数え年 88 歳の米寿の祝い。

９）バッタ。イナゴ。小は愛称。

10）井戸、泉。

11）屋号。村番所をしていたことから、バン殿内と屋号がついたという。

12）部落の神を祭ってある建物。

13）村落祭祀を司る神女。

参考文献

遠藤庄治（1990）『かつれんの民話　上巻　離島編』勝連町教育委員会

小島瓔禮（1987）「藪地島と浜比嘉島―創世神話と民衆の神道神学」谷川健一編『日本の神々―神社と聖地　第 13 巻　南西諸島』白水社

福田恒禎編（1966）『勝連村史』勝連村役所

外間守善・西郷信綱（1972）『日本思想大系　第 18 巻　おもろさうし』岩波書店

山下欣一（2003）『南島民間神話の研究』第一書房

参考ウェブサイト

沖縄観光情報 web サイト　mahae plus ハイサイ沖縄！
http://www.ocvb.or.jp/index.php?current=Page_Header&action=General_Page&mode=isel&lang=ja&Template=traffic

沖縄情報ガイド　http://www.okiinfo.com/tokusyu/tokusyu015.html

沖縄情報 IMA　http://www.okinawainfo.net/index.html

屋慶名エイサー　http://www.jinjin.jp/yakena-e/yakena-eisa.htm

浜比嘉ハウス　http://www.jinjin.jp/rent-hamahiga/index.htm

yonaguni submarine ruins 海底遺跡　http://www.wonder-okinawa.jp/024/japanese/moji/

Wikipedia「おもろさうし」　http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%81%8A%E3%82%82%E3%82%8D%E3%81%95%E3%81%86%E3%81%97

市区町村インデックスマップ　http://watchizu.gsi.go.jp/prefmap/okinawa.html